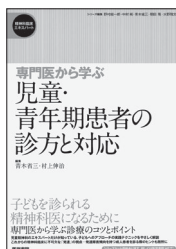


書評

[評者]
大森哲郎
徳島大学大学院・精神医学



《精神科臨床エキスパート》 専門医から学ぶ **児童・青年期患者の診方と対応**

青木省三・村上伸治 編
野村総一郎・中村 純・青木省三・
朝田 隆・水野雅文 シリーズ編集

B5 頁240 2012年
定価6,090円(本体5,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01495-3]医学書院刊

一般精神科医のニーズに、最も実践的な観点から 答えてくれる一冊

児童・青年精神医学の専門家が、一般の精神科医に向けて児童・青年期患者の診方と対応を述べた貴重な一冊である。編者の序文によると、「執筆者には、自分の経験と勉強を通して身につけた臨床のエッセンスを、先輩が後輩に伝えるようなつもりで記していただいた」とのことである。この意図が実に見事に実現している。

執筆は24名の児童・青年期を専門とする精神科医。このうち大学などの教育研究機関に所属するのは8名、病院や福祉施設などに所属するのが10名、クリニック6名という構成である。臨床の第一線に立っているセンスのよい臨床医を主とした布陣とみてよいだろう。構成は、「子どもの面接・評価・診断」「子どもへのアプローチ・治療総論」「子どもの精神症状の診方」「子どもの周囲へのアプローチ」と4部からなり、各部はいくつかの章に分かれて、全部で24章、執筆者一人が一つの章を担当している。

たいてい分担執筆者が多くなると微妙に足並みが乱れて統一感を失いがちになり、通読しにくい本となりやすいのだが、この本に関しては、それはまったく当てはまらない。むしろ、それぞれの執筆者がそれぞれのパートにおいて何を述べるのか、ページをめくる楽しみを倍加させている。みな伝えたい臨床の知恵や作法をもち、それを伝えたいという気持ちをもっている。伝えるための文章作法にも長けている。だから、読んでよくわかるし、読んでいて楽しい。評者にとっては、執筆者は旧知の人から、講演や論文を通して名前を知人、さらには(不勉強にして)まったく未知の人まで含むが、未知の人でも読み終わると旧知の先輩から良いことを教わったような気分になった。

昨今、児童・青年精神医学の知識と診療技能の向上を求めている一般精神科医は多い。評者自身もまさにその一人である。大人になって初めて事例化する高機能の発達障害や、それを基盤にもった気分障害や不安障害を診る機会が増えて、もはや成人の精神科診療でさえも発達障害を知らずしては成り立たない。そのうえ多くの精神疾患が実は児童・青年期に萌芽や発症をもっていることが知られるようになった。児童・青年期と成人の精神疾患は今まで認識されていた以上に連続しているのだ。一人一人の患者を診る際にも、発達過程および発達障害という観点は大切になっている。

本書は、そのような一般精神科医のニーズに、疾患そのものの解説ではなく、診方と対応という最も実践的な観点から答えてくれている。もちろん、大人と子どもの精神疾患の診方や対応に根本的な乖離があるわけではない。しかし、通読するといくつかの重要な違いにも気付かされる。診療期間中にも目に見えて生ずる成長と発達、子どもにとっての体験の意味の重さ、家庭と学校の影響の大きさ、などは子どもを診るときに際立ってくる特徴であることが再認識させられる。

しかし、なによりも評者が感心したのは、執筆者に共通する、窮地に立たされた繊細な存在への深くて優しいまなざしである。自尊感情の尊重、長所への着目、深入りを避けるという良識、病気を欠如とみずの特徴とみる視点、症状や行動の裏にある健全な心理への注目、「ワンポイントリリースという感じ」と表現される役割の控え目な限定、など強調されることすべてにおいて、傷つきやすいものを傷つけないための周到な配慮に満ちている。読んでいて、腑に落ちるところやハッと気付かされるところに何度も出会った。タイムリーなテーマを専門的に扱っているが、普遍的な臨床の英知と作法が随所にちりばめられた一冊でもある。